大倉邦彥監修

躬行

皇紀二千五百九十九年

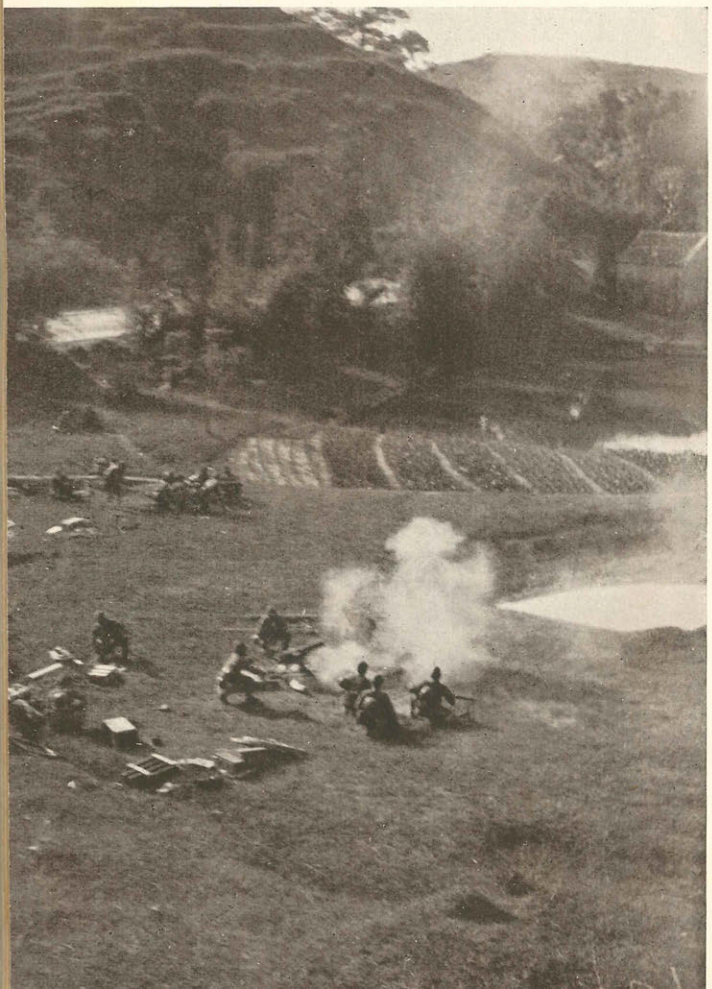
三月號

(館本所究研化文神

後編記

△聖戰下に紀元の佳節を迎へることになりました。大和の橿原に宮柱太しき初めしより二千五百九十九年。全世界を一家の如く共榮の樂土となさむ(八紘一宇)と仰せ出だされし神武天皇のおほみことのりは、支那事變を通じて、今こそ力强く實現されようとして居ります。△東亞の新秩序樹立と云ふのも、このおほみことのりに垂示したまへる道理の開顯であります。△正月早々、近衞內閣は平沼內閣となつて、興亞政策の舵を取ることになりました。新首相の聲明に、總親和・萬民輔翼・祭政一致の政治をめざして、興亞の聖業遂行の態勢を一層强化する旨が强調されました。△曾て林內閣によつて提唱された祭政一致は、こゝに再び平沼首相によつて、政治の指導原理として取上げられることになりました。神國日本の政治の大本、時局下特にその徹底を望んで熄まないものであります。△世界の政治舞臺は、今、全體主義と民主主義と共產主義の三ツ巴で、もつれ合つて居ます。全體主義に立つ國は、既に日本と防共の契りを結んだドイツ、イタリーであり、民主主義を代表する國は、フランス、イギリス、アメリカの列强であります。△之等の關係が、東亞の政局に直接間接の影響を與へて、複雜な波紋を描き出して居ります。△國民政府に對するイギリス、フランスの援助、ソ聯の後押しなど、彼これ考へ合してみますと、事變の前途は益〻嵐の危險にさらされて居ることを思ふのであります。▲今月から用紙を變へる事に致しましたが、時節柄不惡御諒承願ひます。△「躬行」同志の御健闘を祈ること切なるものがあります。

昭和十五年一月二十五日印刷
昭和十五年二月一日發行
定價送料共一部金五錢
横濱市神奈川區太尾町大倉山
編輯兼發行人　山田勝二
東京市蒲田區仲六郷一ノ五
印刷者　三省堂蒲田工場
代表者　喜多見昇
横濱市神奈川區太尾町大倉山
發行所　躬行會
電話横濱綱島五〇番
振替口座横濱四六〇一番



明治天皇御製

日の本の國の光のそひゆくも神の御稜威によりてなりけり

三箇の信條

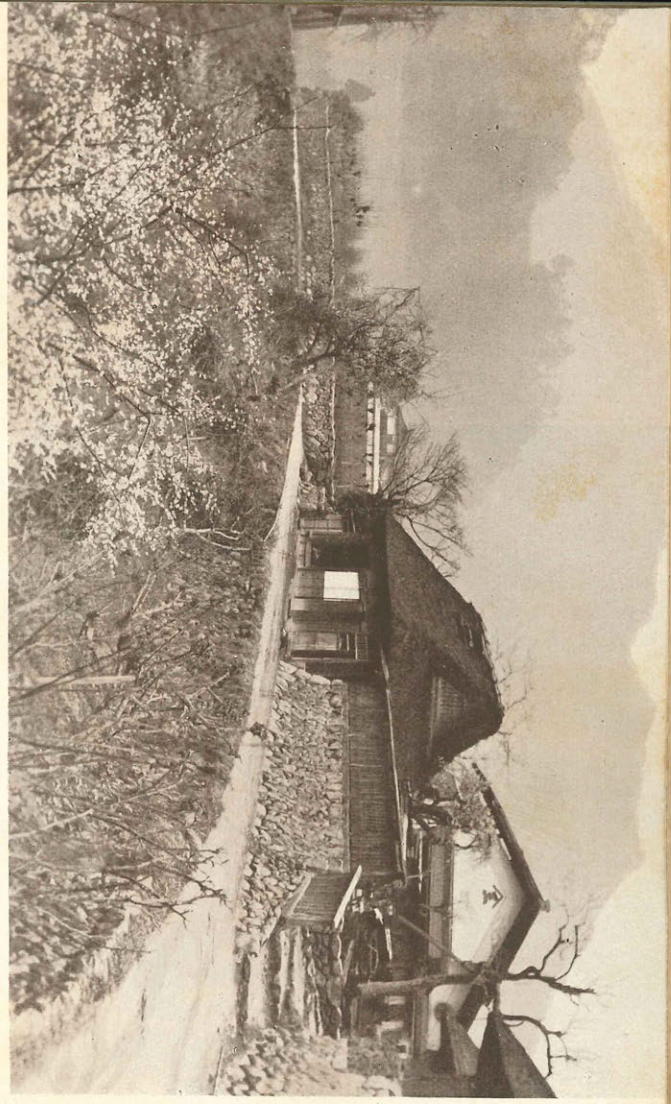
一、皇國精神を深める事
二、世の爲め家の爲めに盡す事
三、眞心を以て物事を判斷する事

五箇の實踐

一、朝早く起きて神佛を拜む事
二、物を大切にし食物は頂いて食べる事
三、勤勞を喜び人の嫌ふ仕事は先に立つて行ふ事
四、禮節と規律とを守る事
五、自分の事は自分でする事

內容目次

御製と寫眞……扉
神國の精神……一
躬行歌壇 もののふのみち……一七
現在に生きよ……一八
感　想……二〇
物のいのち……二三
連續講座 武士道(四)……二六
大倉山だより……三〇
編輯後記……三三



早春

神國の精神

日本人の光榮

今日此頃冬枯れの寒空には、草木も息を潛めて居るかの樣に見えます。でも、やがて後一月も經てば元氣な芽を出して參りませう。その準備はこの寒さの中に出來つゝある筈であります。その長い苦しい準備時代があればこそ、時が來れば花を咲かせ實を結ばせるのであります。丁度これと同じ樣に、神國日本の精神と云ふのも、遠く神代の昔から永い間の眼に見えない民族的修練の結果でありまして、更に又將來表はれて來るであらうところの日本民族の創造發展性を云ふのであります。

こゝ六七年前から急に日本精神の聲が叫ばれる樣になつて、今日ではもう流行語に迄なつた感があります。しかし、その正體は何かと云はれると、直ちに返答が出來ない程に複雜な意味を持つて居ります。從つて、神國日本の精神を說明しようとする人々は樣々な說明を加へて居る樣であります。左樣に樣々な說明があります丈けに、却つて神國の精神と云ふのは、掴み所がないとさへ云ふ人があります。

一體、物の說明と云ふものは、外觀からする場合もあれば、內容からする場合もあります。其上見る立場を變へてながめると、一つのものでも色々樣々に見えるものです。況んや形のない精神上の說明でありますから、複雜になり、樣々に變つた云ひ表はし方があることも止むを得ません。其上、說明ではなくて本物を掴まうとすることは、一層六ケしいことであります。神國の精神と云ふのは、神ながらの道、つまり日本の道と云ふことであります。道は世界に通ずと云ふ言葉通りに、これも日本人丈けに通ずると云ふ樣な、狹いものではありません。中外に施して悖らず、古今に通して謬らざる大道であります。しかし、私共は日本に生れて來ま

したから、世界に通ずる大道を行くに致しましても、先づ日本から歩き出さなければならない事は當然であります。

それでは、日本人としての中心は何かと云へば、神皇信奉であります。神皇と申上げるのは、神にまします　天皇と云ふ意味であります。卽ち天照大神と御一體で、天照大神の御延長である、現御神　天皇に對し奉つて、萬民と國土萬物一切が捧げ奉つて歸一すると云ふ信仰、之が卽ち神皇信奉なのであります。

更に悠久の古に遡つて、大八洲國日本の國土建設のことから考へて參りますると、天神の詔によつて、伊弉諾神、伊弉冊神二柱の神が、この日本を生み固め、造り給うた事から始まつて、天上天下を惠み遍く御經營遊ばされる天照大神が御出現遊ばされました。そして、八百萬の神々は、天照大神の御光を仰ぎ乍ら、天照大神に歸一合體して、神國日本の萬代搖がぬ基礎を確立せられたのであります。

この樣にして、天照大神の御神德によりまして、天孫瓊々杵尊を、豐葦原瑞穗國にお下しになりました。さうして、神國日本の基礎となつた、數々の御神勅を賜

はりまして、歴代天皇に及んだのであります。斯様にして歴代天皇は代々の國民に對して御德を垂れさせ給うたのであります。臣民の方では、天皇を神と仰ぎ、丁度神代の昔、八百萬の神々が、天照大神に對して、輔翼し奉つた通りに、天皇の中に天照大神を見奉つて、皇運を扶翼することを光榮と考へて參つたのであります。

神國の習はし

それから又一方に、國民の實際生活の中に表はれて居りまする神國の習はしを考へて見ますると、子供が生れてやつと外に出られる樣になりますと、母親に抱かれて、何よりも先にお宮參りを致します。部落々々には必ず氏神樣が祭つてありまして、此處は村人の心の故鄕となつて居ります。私の田舍などでは、四季折々の鎭守のお祭には、村人は總出でお參りを致します。其外おこもりと云つて度々神前に村人が集まつて直會を致します時は、圓を造つて其中の長老格の年寄の一人が、「四海波靜かにて……」と謠ひ出します。すると一座のものは之に唱和して、「君の惠みぞ

有難き」と云ふ所で結ぶ一くさりの儀式は、忘れることの出來ない懷しくも深い印象として殘つて居ります。それから、田舍に限つた事ではありませんが、家を建てる時には、先づ地鎭祭と云つて神祭り、棟上げ、落成と云つても神祭り、愈〻住まふ段になれば必ず神棚を設けます。佛樣を祀つて居つても必ず神樣を祭ります。結婚の式も神前で擧げるし、新年の行事も神參りに始まります。人間生活のすべてが、神に始まり神に終ると云ふこんな事實は、我が國が神の造り固め護り給ふ國であると云ふ、意味をその儘行つて居るのであります。つまり、國は神國であり、君は現御神　天皇であり、國民は齊しく各〻の仕事を通じて　天皇の大御心に添ひ奉ると云ふところに、神國の精神が永遠に生きて參つたのでありまして、之が卽ち神國精神の骨髓なのであります。

扨て斯樣な神國日本の精神は、私共に取つては、決して單なる說明や頭の中で肯くと云ふだけに止まりません。之を私共の魂の中に養ひ育て、鍛錬强化することによつて、現實の仕事、働きの中に力强く表はして行かなければなりません。

私達の今日あるのは、單に私達の努力の結果ではなくて、大祖先より相續した靈の宿る身體であります。そして又同時に。將來子孫の時代を榮えしめる、出發點でもあります。祖先と子孫との間にある永遠の靈肉のスキッチになつて居るのでありますから、決して一人の個人と考へてはならない。開闢の昔から綿々として傳はつた、神國精神を天壤無窮に嚴然たらしめると云ふ、重大使命を持つて居る自分なのであります。

縱にさうであるばかりでなく、横の關係に於きましても、同じ時代に、生きて行く國民同士は、天業翼贊の一心同體であります。斯樣に縱にも横にも、切離すことの出來ない、立體的な相互關係を持つて居ります。そこには個人主義を許さない全く一丸となつたものでありまして、所謂全體主義でもありません。卽ち天皇を中心とする歸一體であります。斯樣な意味に於て、國民は皆手を取り合つて皇運扶翼の道に邁進することが、神國日本を神國日本たらしめる道であります。日本人は、假令この肉體は滅んでも不滅の魂は神國の彌榮のために守護して居ると云ふ信仰を持つて居ります。さればこそ、身命を擲つた忠臣義士を神として祭ると云ふ美風も、神國日本の特長となつて居ります。日本精神の權化と云はれる楠公を祭る湊川神社や、乃木神社があり、護國の英靈を祭る靖國神社があるのもこの意味からであります。斯樣な所が、西洋人の思想には不可解な點だと云はれて居るのでありますけれども、其處が神國日本の精神を永遠ならしめる重點であります。

精神の體認と實現

斯樣な神國精神が表はれた國民道德には、權利だの義務だのと云ふ考へはなかつたのであります。君は民を養ひ民は君の爲めに捧げ、親は子の爲め子は親の爲めに捧げると云ふ捧げ合ひの道德であります。捧げると云ふことは犧牲になることではなくて、自分を捧げて相手の中に生かす事で、さうして雙方が永遠の命として生きようとする、神ながらの一體精神の道德であります。母親が凡てを忘れて子供の爲めに捧げると云ふことは、犧牲ではなくて母親自身を子供の中に生かすことであり

ます。だから九割九分を捧げた母親は殘り一分の値打しかないと云ふのではなくて、九割九分の値打を持つのであります。捧げれば捧げるだけそれだけより高い値打を持ち乍ら、而も相手をもより高くすると云ふ雙方完成の道德であります。

個人本位から成立つた國家に於いては、個人の幸福利益を國家成立の主眼と致しますから、その間に利益の爭ひを避けて住みよき集團的國家を造る爲めに法律が發達したのであります。そこで近世國家の文明國は法治國家でなければならぬと云ふ觸れ込みで、我が國でも西洋流其儘の法律を移し植ゑたことは御承知の通りであります。今でも、年々法律の數は殖える一方であります。しかし、法律はいくら完備されても法治國家流に法律一點張りでは、神國精神を歪めるものであります。

神國の理解を缺いだ法律萬能の思想は、我が國の永い傳統で、洗錬された捧げ道德や、一體精神を薄めて參りました。近來の特長は、自分の利益を權利として主張し乍ら、負擔になる義務は成可く減さうと云ふ手前勝手な考へが出て來て、自己擁護の爲めに矢鱈に法律的に、又は理論的に理窟張つた痘しい鬪爭の殖えた事であります。願はくば、捧げ合ひの日本の精神を養ひ、特に君と國とに捧げて、神國精神を深める爲めに、法律も教育も政治も產業もありたいものであります。さうでありませんと、神國精神の美點を失つて、西洋の民衆國家の惱みを味はなければならぬと云ふ、洵に殘念なことになる事を氣遣ふのであります。

明治の御一新の大業は、神國日本の姿である、天皇國家に歸らうとしたのでありました。永い間武家に御委ねになつた政治も　天皇御親政になりまして、專ら國本を固めて世界の大勢に順應しようとして、歐米の文物を採入れたのでありました。それで明治初年の先輩は矢張り心の奧に、日本精神を基礎として、歐米の文物を學ぶと云ふ態度でありましたが、二代目三代目と經て、今日は孫の時代とでも云ふべき時であります。つまり、祖父の時代は、丁髷で洋書を讀むと云ふ氣持でありました。二代目は、餘程日本精神が薄れて、歐米づくめの時代とでも申しませうか、西洋化することが最良の進步だと心得て、若し兩者の間に矛盾があれば、惜し氣もなく、日本の傳統を捨てることに、躊躇しなかつたのであります。その次の孫の時代

と云ふのは、今の青年諸君に當るかも知れません。三代目は何事に限らず六ケしい時代とされて居ります。世間の諺にも、「賣家と唐様で書く三代目」と云ふ言葉さへありますから、先輩もさる事乍ら、今の青年諸君が最も力を注いで神國精神の涵養に力めて、尊嚴なる國體を明徴にして頂かなければならぬと思ひます。それには、只だ本を讀んだり、講演を聞いたりする丈けでは、單に知識を受入れるに止まつて、その精神が體認され洗錬されて、之を日常の本務に、實現するものとは、なり得ないと思ひます。勿論知識として、口や筆で表現する事は出來るでありませうけれども、掛聲ばかりでは、眞に私共の私心を離れて、神國の本領たるところの皇運扶翼の大道を生活の全面に顯現することは覺束ないのであります。ヨイトコサとか、ヨイサとか云ふ掛聲は、物を持上げたり力を出したりする時に云ふ言葉で、力を出さないでたゞ掛聲だけで神國精神があるぞと叫んでも、氣休めになる丈けで、その實は體認ともならず實踐とも出て來ないのであります。そこで私は、行と云ふ實踐によつて精神を磨かれば、神國は生きて來ないと云ふ事を強く主張したいのであります。丁度鏡の表の硝子は磨かれて居ても、水銀を以て裏づけなければ鏡にはなりません。それを鏡と云へば硝子のことだと思ひ込んで居る樣に、水銀の裏づけのあることは忘れ勝であります。その樣に日本精神も亦行とか實行とかの裏づけなしには、一種の觀念的なものになつてしまひます。

行と云ふのは身も心も共に行ずることであります。神に參拜することなしに、神の偉大さを何程說いても始まりません。

祭りの本義

我が國は神の末なり神祭る昔の手振り忘るなよゆめ

と　明治天皇の御製に御示しになりました通り、肇國以來、皇室は勿論、國民も一貫して神祇を御祭りして參りましたその事柄は、單に形式や儀式だけのものではなかつたのであります。神國日本の命を、益〻命づける爲めの根本的な、一大行事であつた筈であります。それによつて神德を宣揚致しまして、皇基を振起したのであ

ります。國民の心身を養ひまして、國家國民の彌榮えに榮えんことを、行事の上に表はしたのであります。畏れ多くも宮中の御祭りが嚴かに而も屢〻取行はせられる事から考へまして、國民の家々の神祭りが御座なりになつては居りますまいか。形式のみに止まる樣では、神國精神を忘れて居ると云はなければなりません。特に禊祓の行事に至つては、殆んどその精神的意義を失つたと云つても差支ない程、形式に流れてしまひました。昔から殘つて居る六月と十二月の二回の大祓の行事の如きは、全日本人一人殘らず、祓ひ淸めると云ふ行事であります。人間の魂は、山に霞がかゝる樣に、何時の間にか曇るものでありますから、その曇りをつまり罪穢を祓ひのけて魂を振ひ起して、神の心に叶はうと云ふ全國的な行事であります。

此の際國民は反省自覺して、禊祓や、神祇奉齋の國民的行事を、見直さなければならぬと思ひます。祭りによつて神德を宣揚致しまして、國民の本務に精進して、大御心に添ひ奉る心得こそ、神國日本の進むべき道であります。生活の爲めに張りを增したり、疲れたりするばかりであります。仕事そのものを精神向上のよすがとして、神國肇造の實際活動として立働きます時に、精神も練れ、輝かしい氣持で國に報ゆる爲めの仕事だと云ふ心が、段々と湧いても來るのであります。

よく世間に云はれる事でありますが、國に盡すとか、公に奉ずるとか云つても、つまりは各人各樣の仕事を通してしか出來ないから、仕事さへ一生懸命でやつて居れば、當然國の爲めになつて居るんだ、別段やかましく理窟張つて考へる必要はないと云ひ乍ら、その實は自分の慾ばりの爲めにのみ心を碎いて働いて居る事が多いのではありますまいか。それは神國精神に合致して居るものとは云はれません。何故なればそんな心得の人は自分の慾念が達せられないと不平を言つたり、仕事を止めたり、甚だしきは國家を呪ふ樣にさへなるからであります。神國日本の精神を養つて本務に精進し、本務に精進しては、神國精神をより深く掘下げて、この兩面が裏と表の關係になつて、始めて神國日本の姿が出來上るのであります。

神國のいのちと東亞建設

神國日本の精神の特長として、昔から顯幽一致の思想と云ふことが云はれて參りました。つまり、總てのものは、眼に見える面と、眼に見えない面とが、表裏一體となつて、完成されて居ると云ふ意味であります。祭政一致と云ふのも、この意味の表裏一體の關係であります。それをば、祭りと云へば直ぐ神がゝりだと云つて却けたり、現實に疎い偏見だと見たりするのは、神國日本の正體を知らない者の云ふ事であります。現實の政治經濟其他萬般の仕事は、眼に見える面に當ります。神祭りとか修養乃至信仰とか云つた樣な事は、眼に見えない面であります。眼に見えない方は何の値打もないと思はれ勝でありますけれども、この一面がなければ、仕事働きは死んでしまひます。例へば夜は眼に見えない世界で、晝は眼に見える世界でありますが、夜の安眠がなければ、晝間の活動が不充分である樣に、修養信仰によ

神國精神とは、眼に見える世界と眼に見えない神の世界とが、交互に作用する所に働く生きた命であります、この命は、神代の時代よりこの方、歷史を貫いて數千年、永い繩となつて續つて來て居ります。どんな長い繩でも、つまりは三尺の藁が繫がつて出來たものに違ひありません。三尺の藁と云ふのは、つまり私共五尺の體、五十年の命に當るのでありますから、私共一人々々の中に、神國をつないで行く兩面の力を養はなければならないのであります。

滿洲事變、支那事變と事ある度に日本精神の聲は叫ばれ乍らも、又一面には、明治以來の長い間に染み込んだ、物質のみで押通さうと云ふ思想習慣が非常な勢力を持つて居ります。さう云ふ譯で之から先の國內諸般の問題は、恐らく此二つの思想戰であらうと云ふ人さへあります。この度の東亞建設は歷史的・世界的な大事業で、日本民族の未だ曾て經驗しなかつた大問題であるだけに、隨分困難に遭遇する事であらうと思ひます。氣の弱い人や、誤れる世界主義者みた樣な人々は中途で弱音を吐くかも知れません。もう既に相當の收穫はあつたから、或程度で切上げたらどう

だらう等と云ふ意見を持つて居るならば、それこそ獅子身中の蟲と云ふものであります。そんな態度では歐米諸國も支那も一緒になつて、日本は息の音も出ない樣に逆波を喰はせられることは分り切つた事であります。東亞建設は東洋の確立、世界平和への貢獻であり、それが日本に課せられた大使命であります以上、國民擧つて大覺悟、大努力を以て之に當つて決してあせつてはなりません。

東亞の建設・世界平和の確立と云ふのも、神國日本の生ける魂としての、和魂の働きでありまして、この目的を妨げる何物をも排除することは、破邪顯正の荒魂の働きであります。かくして建設され、創造される姿は、幸魂の實現に外ならないのであります。之こそ神國日本が世界を一大家族とする八紘一宇の大精神であります。國民は、斯樣な神國の微妙なる本質を實現することが出來る樣に、精神的にも、肉體的にも鍛錬される事によつて、始めて絶大なる氣宇と迫力とを、養ふ事が出來ると信ずる者であります。

もののふのみち

やまをぬくいきほひあれどなさけある武士の姿をいまもみるかな

武士の道をつたへし日本はよこしまくだくちからしめさん

たたかひのにはにたつ身はおしなべて我が大君の御楯なりけり

すすめよと號令あらば彈雨にもさきがけきそふつはもののむれ

苦樂をば軍旗のもとにともにしてむすぶ露營のゆめまどかなり

現在に生きよ

昔の言葉に前後際斷と云ふことがある。讀んで字の如くであるが、つまり過去と未來にまつはる煩しい心の縛れを、きつぱりと卽今に斷ち切れと云ふことである。澤庵和尙は「不動智神妙錄」と云ふ書物の中で、柳生但馬守に對して武道を禪の境地か

「前後際斷と申す事の候。前の心をすてず、又今の心を跡へ殘すが惡敷く候なり。前と今との間をばきつてのけよと云ふ心なり。是を前後の際を切つて放せと云ふ義なり。心をとゞめぬ義なり。」

と述べてゐる。此の事は唯に武

眞理ではなからう。實際、我々が多くの場合、煩悶し、愚痴を云ひ、焦燥するのは、悉くと云つてもよい程、かゝる斷つべきものに心を留めて自らにして自らを苦めてゐる結果である。

最近、如何にも事新しい標語のやうに「現在に生きよ」などと云ふが、その現在は全く何のわだかまりもない正しい淸い堂堂たる現在であらねばならない。現在さへ良ければ過去や未來がどうあらうともよいと云ふやうな刹那的な快樂主義者の現

過去・未來を斷つと云つても、此の意味を取違へては大變である。大體、今日の若い者には眞劍な心持が足らない。働きながら給料を勘定したり、御飯を戴きながら食物の不足を云ふ。勞働三昧・食事三昧と云ふ妙味を知らない。學者は學者、教育家は教育家、勞働者は勞働者で何れももつと積極的に自己の天職に對して正直であり、眞面目であらねばならない。

然るに現在の事實は我々の期待に沿ふものであらうか。現在の日本をして、更に雄々しく立

たしめるものは、國民精神總動員の言葉ばかりではない、實質として各個の國民のそれぞれの現在の生活を價値あらしめると云ふことが根本であらねばならぬ筈である。我々の生活は量としての團體から云へば、極めて微々たるものである。然し我々の交渉を持ち、關係する社會の面は、極めて種々雜多である。我々が能く自己を修練し反省し、正しい生活をすることによつて、その相互關係は確かに部分から全體へと變つて行くのである。昔の聖人と云はれ、傑僧

と稱せられた人は常に全く自己の修業に對しては生命をも賭してかゝつた。現在を生かしてかかつた。誠にかゝる達者が今日に於ても、我々の師表たり得る所以のものを考へて、進んで心境を磨かねばならぬ。

前後際斷、現在そのまゝがそつくり生活の全體であり得るといふ充實した境涯こそ望ましいものである。嘗て古人が嚴い修業を經て「柳は綠、花は紅」と詠つた底に徹して、須らく靑年は純一無雜にして天地に恥ぢざる現在に生きねばならぬと思ふ。

感想

○

改革、改新の要ありと云つて、新しい機關が附加へられるばかりで、從來のものを其儘にして改革しない限り、本の木阿彌で、ほんの一時の申譯に過ぎなくなる。

○

分り易くも云へるものを、態々難かしく云ふのは、西洋學の直譯で、未だこなれて居ない證據である。そして教へる者も學ぶ者も難解なのが値打だと思ひ込んで居るらしい。しかしそれは世間に緣のない概念の遊戯でなければ、包裝過剩の商品でしかない。

軍備外交貿易移民に縛られた日本は、正直に消極政策を取つて、國內の爭ひを激化せしめた。滿洲事變に夢醒めて、東亞新秩序の建設こそ東洋共同の更生だと氣がついた。之が八紘一宇の精神である。

かくして國內にも東亞にも日の光が射込んで來る。

○

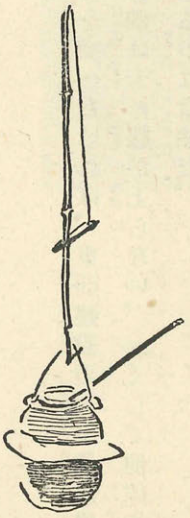
國の利益や兵力の計算から戰爭したことは未だ曾てない。正義と生命の爲めにのみ戰つた聖戰であつた。天佑も神助も其處に加はつた。

ロシアが來ようと、英佛米が文句云はうと、邁進の一路あるのみである。平常時の外交頭や常識論者は頭を換へて、國體精神と聖戰目的の認識から出直さなければなるまい。

○

從來の學問教育は、遣り方を變へなければ、東亞建設の大事業は覺束ないと氣が着いた。然し教育畑は未だ腰が上らない。かくして他律的に否應なく搖動かされる時が來るのは當然だ。

物のいのち



筑波颪に法衣の裾を靡かせながら、山門の石段を掃除してゐた雲水の一人が云ひ出した。

「大衆には天井粥ばかり喰はせて置きながら、皆の寢靜まる頃を覗つて別菜(特別の御馳走)を拵へ、藥喰に頬を叩いてゐる大鼠奴を、和尚には未だ御存知ないと見える。」

この陰口は、まもなく道顯和尚の耳に入りました。和尚は、心から默山を信じて、東昌寺の典座るやうな人ぢやないとは思ふものの、餘り評判がうるさいので、此まゝにも捨置けません。或日の事、雪の降るのを幸ひに、和尚は風氣と云つて、夕飯にも就かず引籠つて居りましたが、夜の坐禪を終つた雲水達が寢靜まるのを待つて、いつしか典座の部屋の前に立つて居りました。襖の隙間から覗いて見ると、默山は爐の前に坐禪を組み、寂然として工夫を凝らして居りますが、鍋は暖かさ

けに襖を開けて入りました。端然として坐つてゐた默山は、徐に振向いて、

「あ！　方丈樣には御風氣と伺ひましたが、御氣分は如何で御座いますか。」

と恭しく一禮して、爐端へ請じました。

「少々風氣のせいか寒氣がしてならぬ、幸ひ溫かさうな物が煮立つて居るやうぢや、一椀所望するぞ。」

「これは私一人の食物で御座います、暫く御待ち下さいませ、別にお粥を煮て差上げます。」

さては、大衆の陰口が本當であつたかと、和尚は雪のやうな眉を昂げて言葉荒く、

「わしは、其鍋の物が欲しいのぢや。」

「斯樣なものはお口に合ひますまい。」

和尚は思はず警策を握りしめました。その時默山は徐に手を抗げて、

「仰せならば差上げますが、御口に合ひませねばお吐棄て下さいませ。」

默山は漸く鍋の蓋を取りました。眼を注げば、雜炊とも、味噌汁ともつかぬものが、無氣味に煮立つて居ります。軈て默山は少し許り、小皿に盛つて和尚にすゝめました。和尚は受取るより早く口にしましたが、喉に通らばこそ、和尚も默山も、暫は下を向いたまゝ言葉もありませんでした。

「不味い喃！　これは一體なんぢや、わしも若い時から人一倍苦行はして來たが、これ丈は喉に通らぬ、そなたはどうして斯樣な物を喰うてゐるのぢや。」

默山は、しばし和尚の顏を見詰めてゐましたが、はらはらと涙を落し、合掌して申しました。

「私は十四の時に出家して、茲に十八年、典座の要職にありながら、生來至つて愚で、修業も足りませぬ。尋常の行持ではとても勤らぬと存じまして、典座となつて此來、臺所の流し口に袋を懸け、流れ出る飯粒や、野菜の切端、ありとあらゆる廢物を袋に受け、毎夜取出しては鍋に入れ、其日の糧と致して居ります。」

靜に聞き終つた和尚は、思はず警策を投げ出して申しました。

「さても、そなたの尊い心を疑つて申譯がない、わしは此通り合掌してお詫びする、それにつけても、此樣な惡食でよくも身體を害はぬ哺。」

「始めの間は辛う御座いましたが、良藥と心得て頂く内、百味の飲食にも增して滋味を覺え、典座の職を拜してから此通り、一度も煩つた事は御座いません。」

戸外は大雪、廣いお寺の本堂には唯一點のお燈明が、炎も立てず寂莫として點る靜けさの内に、和尚と默山が互に合掌し合つた時、二人の頰には感激の涙が光つて居りました。

斯樣に陰德を積んだ默山が、三寶鳥で名高い群馬縣は迦葉山の御開山に請ぜられたのも決して偶然ではありませんでした。

又曹洞宗御開山、道元禪師は越前の山奥、水の豐富な永平寺に於てすら、半杓の水で用を達し半分は元に返し、草木に與へる所に水の生命を認められました。

世は擧げて冗費の節約を唱へ、資源の愛護を叫んでゐる今日、この短い實話を通して考へさせられる幾多の問題があります。

つまりこれ等は物が無いから、或は少いからではありません、これこそ物そのものの生命を自覺し、有難さを感じた結果、物を粗末にしては勿體ない、と云ふ宗教的信念の顯れでありまして、かかる信念を國民全體が持つやうになつた時こそ、資源愛護を叫ぶ必要もなく、物資缺乏の心配もない、如何なる事變も國難も、打開して餘裕綽々たるものがあるであらう事を信ずるものであります。

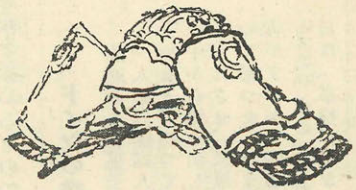
「ドイツの婦人」

銀座のある菓子店へ這入つて來た一人の外國婦人が、買ふものをきめると、持つてゐた風呂敷包みの中から箱を出してそれにお菓子を入れさせ、又風呂敷に包んで持つて歸つた。たまゝこれを見た客がすつかり感心して、店員に「えらいものですね」と云ふと、店員は「事變が始まつてから、あのドイツ婦人は何時も箱を持つて買ひにいらつしやいます。一番はじめに箱を出された時、私が一寸ためらひますと、婦人は、日本は戰爭してゐますから儉約しなくては物が足りなくなります。包紙も風呂敷がありますと申してかけさせません。全くえらいものです」と云つた。

かう云ふ記事が昨年の暮近い頃の新聞に載つて居たことを御存じの方もあらうと思ひます。この感心なドイツ婦人は我國に駐在してゐるドイツ外交官の夫人であつたと云ふことも後日の新聞に書かれて居りました。

流石に世界大戰の慘憺たる災禍の中から、極度の困窮に耐へ、列國の壓迫を克服して今日の立派なドイツを築き上げた國民の姿がこの一婦人の行爲にも偲ばれて頭の下る思ひがします。

粥種が御飯となつて食膳に運ばれる迄には、七十二度の手數がかゝると申します。されば「一粒米の重きこと須彌山の如し」と云ふ、典座の精神も顯はれて來るのでありまして、私共は先づカロリーを案じ、ビタミンに心を痛めるよりも、幾多の人々の勞力と神佛の加護による事を感謝し、心身を癒す良藥と心得て頂く所に、本當の意義を認めるものであります。



連續講座

武士道（四）

その淵源と發達

第三節　鎌倉時代の武士道

東國武士によつて次第に高く次第に強く打ち鳴される武士道再興の鼓の音は、先づ夜明け前の一頻、利根川邊りに生ひ繁る葦の葉露を搖がせてゐたが、漸ては旭日に映ゆる富士川の白鳥の夢を驚かせ、更には屋島・檀の浦の砂濱にまで響き渡り、終には博多の浦に吠ゆる仇波を打ち靜めるのであつた。

かゝる武士道の一大發達期の代表者となれるものは、言ふまでもなく武門源家の嫡流頼朝その人であつた。逆風吹き捲くる伊豆蛭ケ小島に少年時代を過した彼が、一度立つて源家再興の白旗を朝風にはためかせるや、源家數代の恩顧を蒙れる家の子郎黨は、先を爭つてその旗下に馳せ參じた。而してこゝに集つた家の

例へば、八十九の老骨を提げて主家源氏のために蹶起した三浦半島の住人三浦義明は、敵軍のためその防ぎ難きを知るや、その子義澄・義連に向つて、

「吾れは既に年八十餘を越え、餘齡幾何もない、仍つてこゝに止まつて討死の決意を固めた。汝等、源家の重恩を受ける家人たることを自覺して、一刻も早く主家の旗下に馳參じて忠節を盡せ。」

と命じたので、その子義澄等は父子生別の悲涙に咽びながらも、殘された唯一つの孝道を歩まんがため、頼朝の元へと急ぐのであつた。（吾妻鏡）卽ち歷代の恩德を受けた主家に對して忠を盡すこと、これが直ちに孝ならんとする道であつた。實に鎌倉時代より江戸末期までの武士道はかゝる主家に對する殉情を主軸として展開を始めたのである。而してその日本刀を片時も離さずに送り迎へる日常生活は、前代から承け繼いだ武勇と信義を一層高く發達させたことは勿論であるが、殊に家名を重んじ、禮儀と清廉潔白を尊ぶ規範の發展は見逃すことの出來ないものであつた。

源三位頼政が以仁王の令旨を奉じて義兵を擧げながら、武運拙く敗亡の際、その侍長谷部信連は、ものの ふの清きその名を輝さんがため、その敗軍の殿に止まつて追ひ來る敵兵に向つて「弓箭とる身は、かりにも名こそ惜しく候。」（平家物語）と叫んだのは、當代に於いて愈〻高揚された名を惜しむ武士の眞骨頂を明白に物語つてゐる。されば、戰場に臨んでは先づ「吾れこそは桓武天皇の後裔……」などとその家の系圖や先祖からの故事來歷を述べたてゝから敵方の武士と切り結んだのである。卽ち當時の武士が戰ふのは、ひた

すらに家名を汚さぬこと、子孫に清きその名の殘ることを願ふからであつて、只勝てばよいといふのではなかつた。あたら惜しき若武者が寧ろ死を急ぐかの如く敵陣に突入して行く果敢な行動こそは、この名譽を尊んで止まぬ武士氣質を明解しない限り、理解することは全く不可能である。

正にこの「ものゝふの名こそ惜しけれ」といふ言葉は中世武士全般の常用語であり、これと同じ意味の「武士の面目刀の手前」とは近世武士全般の慣用語であつた。而してこれに類似する理論は外國にも數多く見受けられる。然しそれらは口先の理論より數歩しか出でなかつたのに對して、我が國のそれは、武士全般の心情から止むに止まれぬ力として必然的にしかも自然に無限に湧き出る清泉であつて、理論と實踐の完全に融合したもの、否寧ろ實踐躬行の方がその理論よりも先じた徹底的なものであつた。

これは賴朝が奥州の藤原泰衡との戰に於いて泰衡の郎黨で剛勇の譽高き由利八郎維平を捕へた時のことであつた。賴朝は先づ梶原景時をして由利を訊問させたが、景時は威高く「正直に白狀しろ」と罵つたので、由利は大いに怒り、「武運劣く捕れの身となつたがこれは武士の習である。かやうな無禮な訊問には答へる口を持たぬ。」と言ひ切つて默つて仕舞つた。賴朝はこれを聞いて「誠に道理のあることである。」と今度は畠山重忠に調べさせることゝした。畠山は元來禮儀正しき武人であつたので、自ら敷物を由利に進めて坐せしめ、禮儀を正して懇篤に問ひ初めたところ、由利は感激して「貴殿は音に聞く畠山殿なるか、前の男の奇怪な態度とは全く反對である。然らば何事も包まず申さう。」と問に應じてすら〳〵答へたのであつた。（吾妻鏡）

かやうに敵士の間にさへ、かくも禮儀正しく應待することが武士道である。一度は頑强なる反抗を試み、幾多の戰友を仆した敵士に對して、憎しみと憤怒の情を禁じ得ないのも、無理からぬところである。されど飜へつて考へれば、今捕虜の繩を持つ吾が身が、いつか立場を代へて捕れの身となることも戰に臨む武人の習であつて、この畠山の態度とこれを正しい道理として認めた賴朝の言葉こそは、當代武士のとるべき唯一つの道であり、而も我が固有の精神たる「神武不殺」の高揚に他ならなかつた。

この禮儀に關聯して武士道の一要訣たる清廉潔白の美風も高潮の度を增して來た。吾等はこの一例として北條泰時の父の遺産分配の場合にとつた態度を眺めよう。泰時は豫め自分やその弟達に分ける遺産分配表を作つて、これを賴朝の未亡人政子に見せてその許可を求めた。然しその分配表には、嫡子たる泰時の受ける額が餘りにも少なかつたので、政子とても

「長男である汝の分が餘りにも少な過ぎるのはどういうわけであるか。」

と問はざるを得なかつたが、泰時は、

「これが正當で御座います。」

と答へるだけであつた。政子の頰からは感歎の涙が止め度もなく流れ、その弟達も兄泰時の志に感激の情を押へることが出來なかつた。この泰時の態度こそ當代武士道高揚の賜物であり、眞白き富士の聳ゆる國に生れた吾等一億の歩むべき大道である。

大倉山だより

第廿回大倉山中等學生修養會開催
於大倉精神文化研究所
期間　三月廿六日――三十日　五日間
申込　三月廿日迄
定員　六十名
參加志望の方へは御申越次第修養會要項を御送り致します。

◇大倉先生の動靜

時節柄先生の講演を希望される向が非常に多くなりましたが、何分御多忙のため一々には應じ兼ねる狀態であります。左に一月以降の分を拾ひ上げますと、

一月十四日　埼玉縣粕壁中學
同　廿六日　日本文化中央聯盟に於て「我が國教育の將來に就いて」
同　廿七日　横濱湘風會に於ける精神文化國際懇話會
二月　一日　警視廳工場協會修養會
同　三日　商工省鑛山監督局
二月　七日　AKより放送講演「神國の精神」
同　八日　東京府立第八高等女學校
同　十一日　日比谷公會堂に於て「臣民道」

尚先生には三月初旬より渡滿支の途に上られることとなり、大連・新京を巡つて、北支に入り天津・北京等を視察、三月下旬に歸朝せられる豫定であります。

◇「躬行の栞」頒布狀況

本誌一月號の附錄として同志の方々に贈りました「躬行の栞」に對する希望は極めて多く、十萬部の栞が忽ちに出つくしてしまふ勢です。國民精神總動員の折柄、精神生活の糧として「躬行の栞」が十萬、廿萬の人々の手に持たれ、躬行の同志が益〻增加して行くことはまことに欣ばしい限りであります。

◇躬行合本を作製

昭和十三年度の「躬行」を纏めて、黑の紙表裝和綴の合本を作りました。部數は極めて僅かしかありません。代價六十錢送料十四錢であります。

◇富士見幼稚園だより

長期建設の目的を完成せんが爲には、將來の日本を託すべき子供の訓育にこそ心を用ひねばなりません。

大倉先生を園長に戴く富士見幼稚園では、幼少の頃から　天皇陛下のみくにぶりの信念を與へることに特に留意して、「强く、賢く、親切に」と可愛い子供達を導き育てて居りますが、この學期末に立派な正しい日本人となるべく尊い種子を抱いて出て行く園兒が約六十名とのことであります。

四月には又明朗な新學期を新しい子供達と共に迎へるべく、目下園兒を募集致して居ります。幼稚園要項、入園申込用紙其他の書類御希望の方は、東京市目黑區中目黑三ノ九九〇　富士見幼稚園宛に御申越願ひ度い由。

修養會感想

大倉山に於ける修養會は毎月數回行はれ、來會者は何時も深い感銘を以て山を下つて行きます。最近の大倉山修養會に參加した或る女學生から歸宅後次の樣な感想を送つて來ました。

×　×

謹んで申上げます。

顧り見ますれば、短き二日間の修養ではございましたが、何物にもかへ難き御指導を受け誠に感謝感激に耐へず、拙き筆をとりて、眞心より御禮申上げる次第でございます。

靜かに机の前に定坐して默想致しますと、先生の謹嚴なお顏が、ともすれば疲れたと良心を僞つて怠けんとする私の心を鞭打ち、思はず襟を正し、眞劍な態度にして下さいます。

先生、常思猛進の御教へにある通り直に今朝から實行致しました。今朝は五時に起床し、神棚に向ひ柏手一拜致し、誓念致しました。それから星を頂いて庭に出で皇居遙拜、それから自分の居間に入つて獨り定坐致しました。今日一日は努めて大倉山に居る積りで一つ〳〵仕事をしました。

が然し、此の行が果して自分には永遠に續くだらうか。否必ず强い意志の力によつて續けて行かうと固く心に誓ひました。

一日や三日なら誰もが實行する。その感激を必ず永續させてゆく覺悟でをります。若しも少しでも緩む心が起つたなら容赦なく御叱り下さいませ。

一切の雜念を離れた眞劍な定坐。靜な雰圍氣を破るものは、偶〻身にしむ樣な警策の響。朝夕の神前禮拜の神々しさ。曉を破つて嚴かに響き渡る鐘の音。太鼓の響。全く神嚴な清らかな瞬間に浸らせる祝詞の聲。すべて何物にも換へ難い清純な二日の生活でした。大倉先生よりの數々の御教訓は從來と異つた感激で深く〳〵身に泌みました。（下略）

大倉邦彥監修

躬行

皇紀二千五百九十九年

四月號

（神文化研究所本館）

編輯

△本月號の卷頭には、大倉先生の放送講話「神國の精神」の原稿を掲載させて頂きました。去る二月七日の夜、AKより青年の時間に卅分に亙り放送せられたものであります。

△神皇信奉の根本信念がしつかり腹の中に呑み込めて居なければ、何度總動員中央聯盟の改組を行つても實績の擧らう筈はありません。

△今日の事態を思ふ時、「躬行」の使命とするところ益〻重大であることを痛切に感じます。同志の方々と協力、三個の信條五個の實踐の普及徹底に努めませう。これこそ思想戰に於ける重要な仕事であります。

△「朝早く起きて神佛を拜むこと」銃後生活の基礎固めは先づこれから。まことに「早起にまさる勤めはなかりけり」です。

△英米佛から曾ての三國干涉のやうにいろ〳〵と刺をふくんだ申入れが送られて來ます。利害を基にした外交駈引は所詮正しい信念と强い意志の前には水泡の如くに消去るより外ありません。チエッコ問題の際にヒットラーの決意の前に、脆くも退却した英佛の算盤外交がそのよき實例でせう。

△昭和八年の今月廿七日、國際聯盟脱退の通告の發せられた日。千萬人と雖も我行かんの當時の決意こそ、今日我々をして聖業を遂行せしめつつある貴重な種子でありました。

△遂に海南島に皇軍上陸。蔣政權は全く手も足も出ない凋落振りで、事實上我々の對手ではなくなつたことが實證されました。

△自由主義經濟思想の本陣も遂に大旋風に見舞はれて壞える時が來ました。學問の自由の牆も日本の風に抗らふすべはなかつたでせう。畏れ多くも　天皇の大權に基いて統制せらるべき日本經濟を知らず、時局の進行と違つた足どりで歩まうとする者は、かく成り行くばかりであります。

昭和十四年二月二十三日印刷
昭和十四年三月一日發行
定價送料共一部金五錢
横濱市神奈川區太尾町大倉山
編輯兼發行人　山田勝二
東京市蒲田區仲六郷一ノ五
印刷者　三省堂蒲田工場
代表者　喜多見昇
横濱市神奈川區太尾町大倉山
發行所　躬行會
電話横濱綱島五〇番
振替口座横濱四六〇一番